

新健康協会では、新しい健康法を伝える「健康新聞」を毎月発行し、人間の持つ治癒力や適応力をお伝えしています。肉体的、精神的なことでお悩みの方もぜひ御一読ください。

# 健康新聞

発行所  
発行人



新健康協会

〒813-0001

福岡市東区唐原6-7-1

TEL:092-661-1531

https://shinkenko.jp



次の御論文は、明主様(当協会の教祖)が、昭和二十五年に発表されたものであります。世界平和と心身共に健全な人間作りを目指す活動に御理解を頂ければ幸甚です。

## 真理を説く

私の唱える説のほとんどは、どこかに今までと異なつた意味が含まれている事を認めない訳にはゆくまい。というのは、今まで唱えられて来たあらゆる説は世に知れ渡り、今更新しく書く必要はないからである。今日何ほど巧妙に説いてみても、それは畢竟同じ説の焼き直しに過ぎない以上、徒勞以外の何物でもあるまい。

なるほど、古くから幾多の聖賢や偉人が輩出しでは立派な教えや説を唱え、人類に裨益した功績はいかに高く評価しても差し支えないが、さらばと云つて世界の進歩につれて、その有用価値が薄れてゆくのもまたやむを得ない現実であろう。とすれば今日以後の時代に役立つべき新しい説が生まれなければならぬ。言うまでもなく、現代人が切実に要望するところのものはこれである。

なるほど既成宗教の教説なども、その当時の民族には極めて大きい価値があつた事は勿論であり、その内容においても、その時の人間の文化程度に適應したのものには違ひなかつたであろうが、長い年月を経た今日、大衆にアピールする力のあ

りようはずがないのは、事実がよく物語つていゝる。しかも大抵の宗教は中途において、幾人かの学者や賢哲がその時代に適應すべく改竄し、ゆがめられた点も相当あるにはある。このようなわけで現存せる宗教自体、現世を救うべき力の大半は失われてしまつたといつてもよからう。しかも問題は古典や文献の難解な点である。宗教とさえいへば、一人の開祖の説でありながら各宗各派に分かれ、なかには宗教争いさえ絶えないものもあるのであるから、真に大衆に安心立命を与える力などは、木によつて魚を求むるの感なくんばあらずである。

元来宗教の本質は真理の具現であつてみれば、真理を説く事によつて、人間の精神的改造が何よりも重要事である。従つて他の事業、例えば社会事業のごときは派生的のものであるにかかわらず、それが宗教本来であるように思われて来たのは、全く宗教認識に欠陥があるのである。しからば真理とは何ぞやという事で、この徹底がなければならぬが、実をいうと真理ほど簡単で分かりやすいものはないのである。故に難解なややくしもの程、実は真理に遠去かかっているとみるべきである。例えば真理とは東から太陽が出て西へ沈み、人間が空気を吸つて飯を食い糞をたれるといふのと同じである。それをどう間違えたのか、昔から真理を非常にむずかしく考えられて来たが、それは理由がある。即ち真の見真実者が現れなかつたからで、それというのも根本は夜の世界であつたからである。

私は四十幾歳の時、重大使命を神から命ぜられるとともに、何人も到達し得なかつた見真実の境地にまで上つたのである。勿論その境地にあつて一切を眺める時、現代文化のあまりに誤謬の多い事に気がつく。従つて一切を明々白々にさらけ出し、全人類の一大啓蒙こそ救いの根本であらねばならない。この意味において私の唱える事も行う事も、今までのそれとはあまりに異なつており、万事型破りのものばかりである。みらるる通り、いかに深遠微妙なる真理といえども、いとも平易簡単に解明する。いかなる学者にも非学者にも理解されうるように説くのである。しかしここに困る事は、私が説くところの真理は、長い間非真理を真理と錯覚し堅く守られて来た人達の眼には、非真理に誤解されやすいことであるが、これも過渡期の一時的現象として、またやむを得ないところであろう。しかし真理はどこまでも真理である以上、時の進むに従つて漸次理解されるのは当然で、それが真理の真理たる所以でもある。何よりも本教教線が、前例をみない程の発展ぶりだ、それをよく物語つているのである。

## 浄霊体験記

2ページ  
3ページ

- 七日目に意識戻り奇跡的な回復…
- あまりの苦しさに死をも考えたが…
- 浄霊知らなかつたら今どうなつていたか…
- 原因不明の病氣浄霊で救われる…

浄霊によって病苦から救われると共に運命が向上し、幸せになられた方々の体験手記でございます。

《あれから54年》

危篤状態から救われる

七日目に意識戻り

奇跡的な回復…

総本部 竹迫広巳(60)



これは私が小学校一年生の時の出来事です。夏休みの朝、私はラジオ体操に向かうため家を出ました。途中交差点があるので、横断歩道を渡っていた私は、かなりのスピードを出した車にはねられてしまいました。事故の衝撃は激しく、八メートル程飛ばされたと聞いています。生死をさまようような状態で、頭を打ち、右半身は硬直したまま、右足大腿部も複雑骨折していたそうです。

両親は事故の知らせを受けて、すぐに病院へ駆けつけ、病室で苦しんでいる私の姿を見て、心臓が凍りつくほどの戦慄を覚えたそうです。両親は以前から新健康協会の会員でしたので、す

ぐに篠栗支部に電話をして、明主様に御守護のお願いをしたそうです。そして、その日から両親が毎日病院で浄霊をしてくれたそうです。

六日間危篤状態が続き、周りの人達が不安に襲われる中、なんと七日目に意識が戻ったのです。両親はその奇跡に涙し、心から明主様に「有難うございます、有難うございます」と繰り返し感謝したそうです。それから一日一日快方に向かい、食欲も出てきました。

その後、自宅療養の許可も出たので、十三日目に退院しました。自宅では両親の他、篠栗支部の方も来て下さり、毎日浄霊を受けました。浄霊を受けるたびに段々と状態が良くなっていき、事故後二十日目には尿意を感じ始め、二十一日目には右手の硬直がとれ、二十五日目には体を起こせるまでになりました。

二十九日目からは立ち上がる練習をし、三十日目には少し歩くことが出来ました。毎日少しずつ歩く練習をし、そして事故から七十一日目に学校へ行くまでになりました。

瀕死の状態だった私が、こんな短時間で再び学校に通えるまでになるとは誰も思っていなかったそうです。当時、大腿部骨折が完治するまで半年はかかると言われていましたが、私は二カ月程で歩けるまでになりました。これもひとえに浄霊のおかげだと思います。右膝はしばらく伸びたままでしたが、その後、曲げることも出来るようになり、正座も出来るまでに快復しました。

この奇跡の出来事は、まさに神様から頂いた賜物です。あれから五十年以上経ちますが、現在もとても元気にしています。

明主様、誠に有難うございました。(福岡県糟屋郡)

《あれから50年》

自律神経失調症

あまりの苦しさに死をも考えたが…

長崎支部 小川晴子(88)



私は昭和三十二年、二十歳の頃、心臓病になったのですが、半年間程の治療で治りました。ところがその後、また心臓の動悸がするので病院に行きましたところ、「異常なし」と言われました。それでも実際に心臓の動悸はしますので、他の病院を二、三あたってみましたが、やはり「異常なし」と言われ、「神経性のものだ」とも言われました。絶えず心臓の動悸がする訳でもないのです、しばらくそのままにして過ごしておりました。

けれども昭和五十年二月、三十八歳の頃から心臓の動悸が激しくなり、気分がすぐれず、また病院に行きました。すると今度は「自律神経失調症」と診断され、薬を飲み始めました。しかし、薬を飲んで症状は変わらず、却って悪化するよう思われました。絶えず胸の圧迫感があり、吐き気や

頭痛もあり、寝ても起きても苦しい状態が続きました。寝てさえいれば楽…だというのならまだ良いのですが、苦しくてたまりませんでした。「私はもう薬を飲んでもダメだ」と思いました。食欲がなく、痩せていて顔色も悪い。そんなみじめな自分が嫌になり、外に出て人前に自分の姿を見せたり、誰かと話をしたりするのも怖くなりました。そのため、家でゴロゴロしている時間が長くなり、六月頃には「死」をも考えるようになりました。

浄霊を受け五日目で一変

ちょうどその六月、自宅のポストに「健康新聞」が配布されていました。新聞にはいろんな方の体験談が書いてありましたが、私は今の状態が少しでも良くなるなら何でも良い…という気持ちでした。でも「助かりたい」という気持ちも強く、すぐに新健康協会の佐々支部を訪ねることにしました。この時も絶えず心臓の動悸がして歩けなかったため、タクシーで支部へ行きました。

初めて浄霊を受けると、背中に暖かいものを感じました。私は何か体が良い反応を示しているように感じ、このまま浄霊を続けてみることにしました。そして、それから四日間、毎日タクシーで支部に行きました。

そして五日目のことです。支部まではタクシーで行っていたのですが、浄霊を受けて体の調子も良くなったので、帰りは歩いて帰ってみました。するとその時から歩く自信がついたので

私は、「浄霊は素晴らしい」と感動し、これからも浄霊を続けたい気持ちで、昭和五十年八月七日、三十八歳の時に入会しました。それからは弁当

を持参して、四カ月間、毎日佐々支部に通いました。そこで支部の先生から浄霊を受けながら、他の人を浄霊することもありました。

こうして支部に通い始めてから二カ月程で顔色が良くなり、心臓の苦しみが和らぎ、少しずつ元気になっていくのが自分でも分かるようになりました。「これで自分も救われるかな…」という思いが起り始め、一日一日、薄紙を剥ぐように回復していききました。

健康新聞が救った私の命…

昭和五十二年、四十歳の時、結婚をきっかけに長崎へと引っ越し、それからは長崎支部に浄霊を受けに行くようになりました。

その後、心臓の動悸はなくなり、元気になりました。時々頭が重いことや身体が辛い時もありますが、浄霊を受けますと、その度に前よりも身体が軽くなります。あんなに外出を怖がっていた私でしたが、それからというもの、「家でじっとしているよりも外を歩きたい」と思うようになりました。

現在八十八歳になりましたが、顔色も良く、周りの方も「すごく元気ですね。どんどん元気になっていきますね」と声をかけてくれます。もしあの時、健康新聞が配布されていなかったら、今の私はありません。明主様のおかげ、浄霊のおかげで現在の私がいます。

一度は「死」さえも考えたことのある私は、明主様に救って頂いたと思うと、言葉に表せないほどの感謝の念でいっぱいになります。苦しみのどん底から救って頂いたこの喜びを、他の方々にもお伝えしたいと思い、体験記を書かせて頂きました。誠に有難うございます。(長崎県長崎市)

《生まれて以来35年》

ゼンソク・コロナ

浄霊知らなかったら  
今どうなっていたか…

広島支部 金森和馬 (35)



私は両親が浄霊を知っていたということもあり、幼い頃から浄霊を受けて育ち、様々なことから救われてきました。

私は生後、言葉が出るまでに時間がかかったそうです。おぼろ気ながら、「しゃべりたいのに言葉が出せない…」という気持ちになったことがありますが、言葉を覚えています。それが四歳になって、言葉が出るようになりまして。ちょうどその頃、体中にあつた膿のようなものが出て綺麗に治ったそう。今思うと、膿が体外に出て、体の中が綺麗になり、言葉も出せるようになったのかな…と浄霊に感謝しています。

小学生になると、ゼンソクの発作が月に一度は出るような状態で、学校を二、三日休むこともありまして。しか

し、ゼンソクも咳と鼻水がたくさん出ると楽になりました。またこの頃は絶え間なく鼻水も出ていました。毎日両親から浄霊を受けて、ゼンソクの発作も徐々に治まっていきました。そして中学生の頃にゼンソクは完全に良くなり、たくさん出ていた鼻水も出なくなり健康になりました。

浄霊を知らなかったら、今頃自分はどうかになっていたのだろうか…という気持ちになり、明主様に感謝するばかりです。

こうして救われた私は、私自身も浄霊が出来るようになりたいと思い、平成二十五年七月二十日、二十三歳で入会し、現在も浄霊を受けて過ごしています。

コロナウイルスも楽になる

令和四年九月、三十二歳の時、私は新型コロナウイルスに感染し、陽性となりました。熱と激しい喉の痛みで食欲がなくなりました。私はこれまでの浄霊の体験がありましたので、この時も浄霊を受けると、一週間程で峠を越え、日に日に熱が下がりはじめ、食事が入るようになりました。コロナウイルスに感染してから十五日目には後遺症もなく元気になり、仕事にも復帰することが出来ました。本当に有難かったです。

私は明主様に御縁を頂き、浄霊を受けて育ったおかげで、様々なケガや病気が救われてきました。こうして何事があっても安心して過ごせることがとても楽しく、感謝の気持ちでいっぱいになります。

一人でも多くの方に、明主様のこと、浄霊のことをお伝えしていきたいと思っています。

(島根県松江市)

《あれから35年》

全身の痛み

原因不明の病気  
浄霊で救われる…

芦屋支部 山口てるみ (77)



これは平成二年、私が四十二歳の時の話です。

その年の九月頃から体がだるくなり、食欲もなく「今年は夏バテが長引くな…」と思っていました。すると十二月に入って、首、肩、背中、腰、足と全身が痛むようになりました。私には何かの病気に違いないと思い、病院で検査をしますと、「異常なし」と言われました。気になった私は、あちらこちらの病院で検査したのですが、やはり「異常なし」ということでした。「異常なし」と言われても、全身は痛く、食欲もなく、夜も眠ることが出来ませんでした。こうした不安な毎日が続きましたので、仕事を休んで、母の実家で休養を取ることになりました。

私の様子を見ていた母が新健康協会の会員で「浄霊を受けてみたら…」と勧めますので、平成三年一月十一日、母と一緒に嘉麻支部へ行って初めて浄

霊を受けました。すると不思議にその夜はぐっすり眠ることが出来ました。そのまま十日ほど実家にいました。毎日支部へ浄霊を受けに行きました。そうしていると大分気分も良くなり落ち着いてきましたので、遠賀郡の自宅に帰り、芦屋支部に行くようになりました。

毒素の排泄によって  
元気になっていく…

芦屋支部では支部の先生から浄霊のこと、浄化作用について色々とお話を聞くことが出来、不安もなくなりました。そして食欲も出て、食事もおいしくなり、夜もぐっすり眠れるようになりました。

私たち夫婦は、この浄霊の素晴らしさに感動し、平成三年二月十一日に夫婦揃って入会しました。入会后、浄霊を受けていると咳が出て、夜中にも咳が出る…という状態が二カ月ほど続きましたが、それによって熱、咳、痰等が出て、毒素が体外に排出されて、体のだるさが取れました。おかげで肩こり、腰痛もなくなり、左手首の腱鞘炎も良くなり、大変元気になりました。

そしてその年の六月には元の職場にパートで勤めることが出来るようになりました。長時間作業でも肩こりもありませんでした。本当に浄霊は素晴らしいと感動したことを今でもよく覚えています。

明主様の偉大な浄霊によって大変なところを救われてきました。それは現在になっても変わらず、毎日が感謝の気持ちでいっぱいです。

これからも多くの方に、この素晴らしい浄霊を伝えていきたいと思っています。

(福岡県遠賀郡)

浄化作用

人間には体内の毒素 (= 不純物) を排除して健康を促進しようとする働きがあります。例えばカゼの場合、体内にあってはならない毒素を溶かすために熱が出ます。溶けた毒素が鼻水やタンとなって排出されるので体の中が掃除され、清浄化されます。

その毒素排除の過程を「浄化作用」と言います。浄化作用は、熱や痛みを伴うので苦しみがありますが、体を健康にする大切な清掃作用でもあるのです。



# 自然農法

## 自然農法体験談



札幌支部  
よこやまひろあき  
横山泰明(71)

私は2010年から自然農法を始めて、今年で17年目になります。耕作面積は、登記上4ヘクタールですが、畑は3ヘクタールほどです。

当初はF1種も使っていましたが、だんだん収量が落ちて来る感じがしましたので、自家採種にこだわって、種を採り続けて肥毒を抜いています。交雑したり、先祖返りしたりしますが、種を選んで、自分好みの品種に固定していくようにしています。大豆や銀手亡、トラ豆、黒豆、小豆、人参、男爵、さやあかね、さつま芋、アロイトマト、トウモロコシ、大根、カボチャ、ナスを自家採種しています。

私の畑は「豊滝自然農園」と言いますが、自然農法を始めた頃は、種芋も取れない、苗も倒れる、病気が出ることもありました。それでも、もともと肥料分があつた頃は良く採れましたが、肥料分が抜けて来ると、作柄は下がっていききましたので、自家採種に活路を求めました。10年間位は試行錯誤だったので、回り道をしてきたように感じます。明主様の自然農法をまっすぐ正しい思いで耕作していれば、もっと短期間で安定するように思います。実際2015年に購入した畑は、2年目から順調に肥毒が抜けて、収量の変化も少なかったように感じます。2025年の豊滝自然農園は、去年と比べて全体

自然農法とは自然を尊び、愛情をかけて育てること、自然力を生かす農法です。

的に収量が増え、歩留まりが良くなりました。豊作だったのは、スイカ、ナス、カボチャ、男爵、人参、小豆、大豆、トウモロコシ、トマトなどです。消費者の方からは、「美味しくなったし、匂いが素敵だし、焼いた時の匂いも好きです」と言われ、嬉しく思いました。

私は、これからの目標として、「体は食べ物で出ています。自然作物で、新しい体を作って行きましょう」ということを強調していきたいです。ご家庭の冷蔵庫、冷凍庫が自然農法の野菜であふれるようにしていきたいと強く思っています。そして、自然農法の野菜を「自然のグルメ」として流行らせます。行列の出来る飲食店のように、「自然の野菜」がブランド品になれば嬉しいです。「自然の野菜で新しい体を作ろう!」を流行らせ、ブームを起こし、自然農法の野菜を食べるだけで健康に過ごせる、ということ伝えていきたいと思っています。



横山さんの畑

## 美の世界



### 北尾政演

### 《桜下美人図》

本作は江戸中後期、戯作者山東京伝としてよく知られた人物の作品です。山東京伝は宝暦十一年(一七六一)、江戸の深川木場の質屋の長男として生まれました。若い頃から絵を学び、北尾重政に入門してから浮世絵師・北尾政演として活動を始めます。絵師としては、安永七年(一七七八)黄表紙の『開帳利益札遊合』がスタートだったとされています。

戯作者としての出世作は、天明二年(一七八二)の黄表紙『御存商売物』。黄表紙とは江戸後期に多く刊行された草双紙の一つで、洒落や滑稽、風刺を織り交ぜた大人向けの絵入り小説のことで、黄色の表紙であることからこのように呼ばれました。その後、蔦屋重三郎を版元とした黄表紙や洒落本でも名をあげ、黄表紙の代表的な作家と目される存在になっていきました。

この頃町人文化は成熟を迎え、こうした風俗文学や浮世絵、狂歌は大流行しましたが、寛政に入ると松平定信による改革で風紀を取り締まるために出版の統制が厳しくなります。京伝も寛政三年(一七九一)には手鎖五十日の刑に処されることになりました。以降はより文章が主体で伝奇的な小説である読本を手がけ、こちらでも人気を博しました。晩年は考証随筆を残し、文化十三年(一一八六)に五十六歳でこの世を去りました。経歴を振り返ってみても、戯作者としてのキャ

リアが中心で、絵師としての活動はそれほど長くなかったとされているため、本作のような肉筆画は大変貴重なものといえます。画面上方にみえる満開の桜の下、ボリユームのある帯、濃紺の打ち掛けに、可憐な桜柄の赤や緑の袴をのぞかせた粋な着こなしの花魁の姿です。切長の瞳のキリリとした表情の花魁の髪は横兵庫に結び上げられており、当時の流行も忍ばれます。天明五年(一七八五)頃の作品と伝わっているので、戯作者としても新進気鋭の若い時期の作といえるでしょう。現実の吉原をよく知る京伝が、その魅力のポイントを画面に収めた、一つの理想の姿なのかもしれません。

解説 松田愛子

晴明会館(美術館)の  
インスタグラム  
はじめました。



晴明会館 「ゆめのうき世に」後期展  
期間.. 令和8年1月6日(火)~5月17日(日)

※晴明会館お問い合わせ ☎(092)661-1535

健康新聞についてのお問い合わせは  
(092)661-1531まで